

「罪から救ってくださる方」

マタイ 1:18-25

(I ヨハネ 1:9)

【1】序

新約聖書の福音書は、時間的には救い主の誕生から記されている。特にマタイは父ヨハネに焦点を当て、旧約聖書の預言の成就を告げ知らせている。ユダヤ人にとって重要なものは系図である。一人の人がどのような家系に生まれたのかが意味を持つ。イエスはダビデの家系に生まれたということは救い主としての印なのである。

ヨセフの婚約者マリアは神の不思議な方法でイエスを身ごもったが、このときヨセフは深い悩みの中にいた。彼には神のことばが必要であったのである。

【2】御使いの知らせ

神は御使いによって夢の中でヨセフにご自身の計画を語られた。それは御子に関する知らせである。

① マリアの妊娠について

聖書は、処女降誕という非科学的なことが記されている。やはりイエスは神話の人物なのだろうか？中にはこのクリスマスの物語を古代世界の「詩」と表現する者もいる。しかし、この記述はユダヤ人にとってはつまずきであり、わざとこのようなことを記す必要は考えられない。この記述をとらえるには、正しい神観、世界観が必要なのである。つまり、全能の主のわざとしてイエスの誕生を理解しなければならないのである。彼は、罪なき神の子として人としてお生まれになった。そのためにマリアは用いられたのである。

② 男の子の名はイエス

「名は体を表す」ということばがあ

るが、まさにその名はこの男の子のこれからなそうとする使命を表している。これから生まれてくる子どもは旧約聖書において預言されていた救い主なのである。福音書はこのことを伝えるためにイザヤ書7章4節のみことばを引用している(マタイ 1:23)。マタイはさらにイザヤ書のインマヌエル預言に説明を加えている。「訳すと「神が私たちとともにおられる」という意味である。」と。この御方は、まさに神が人となり、私たちの間に住まわれるために生まれたということである。ヨハネの福音書は冒頭でこの神の受肉を高らかに宣言している。人となって生まれた神(インマヌエル)、このお方はイエス(主は救い)なのである。

③ 罪からの救い主

イエスの救いはどのような救いなのか。彼は、ご自分の民をその罪から救ってくださるのである。私たちはイエスに何を期待しているのであるだろうか？その期待が的はずれな自己中心的なご利益信仰になってはいないか？

バプテスマのヨハネはイエスを見たとき「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」と叫んだ(ヨハネ 1:29)。私たちは罪を軽く見てはならない。私たちは自分の罪を解決するためにはイエスによらなければならないのである。

私たちにはやがてくる神の怒りから救ってくださる救い主が必要なのである。私たちの最良のわざでさえ、神の義を満たすことはできない。神のみ前に立つとき、私たちはその聖さによって汚れが明らかになる(イザヤ 64:6)。私たちは深刻に悩まなければならない。その結果、解決は自分の中にあることを知ることができる。

今や私たちはこの救いをいただいたので、神に従うのである。